

責任者	人間福祉学部長	担当部局	人間福祉学部
-----	---------	------	--------

1 人間福祉学部の理念、目的、各種方針

人間福祉学部の理念	変更の有無
人間福祉学部は、永年の伝統を有する「関学社会福祉」の教育研究を継承、発展させつつ、さらにはスポーツ科学・健康科学教育研究及び社会経済研究の資源を活かしながら、それらとの有機的な連携をより一層強めることによって、様々な社会的要請に応えることを目的として設立された。本学部は「人間(humans)」とその生活環境としての「社会(society)」、そしてその両者の交渉関連として「交互作用(transactions)」に関わる諸課題に対してソリューションを提供することによって、質の高い生活と社会の実現(Improving Quality of Human Life and Society)に貢献する人材の輩出を目指す。そのためには、堅実な学問的研究とそれに基づく教育に裏付けられた「実学の府(center of practical science)」であらねばならないと考える。	有・ <input checked="" type="radio"/>
人間福祉学部の目的	変更の有無
地域社会と国際社会における「人間」とその生活環境としての「社会」、そしてその両者の「交互作用」の中で生じる福祉ニーズをはじめとする様々な生活課題へのソリューションを見出し提供できる専門の人材と、市民として地域及び国際社会の福祉向上に貢献する人材の養成を行うことを目的とする。  <b>社会福祉学科</b> 豊かな人間性と人権意識、そして深い知識と優れた実践能力を持つソーシャルワーカー、あるいはソーシャルワーク・マインドを有した市民を養成し、さらにはそれらの養成に従事する人材を育てていくことを教育研究の目的とする。同時に、日本及び国際社会における社会福祉とソーシャルワークの発展と展開に貢献していくこと、そしてそれによって社会福祉学の理論と価値を国内外に広く浸透させていくことも目的として位置づける。  <b>社会起業学科</b> 国際化や多様化が進む現代社会において、社会生活を総合的に捉える視点、地域社会の生活問題を連帯して解決できる自治能力、グローバルな水準の思考力や実践能力を身につけた人材の育成を目的とする。持続可能な福祉社会の実現に向けて、ローカル・ガバナンスに視点をのこした総合的アプローチに基づき、多元的・国際的に行動できる「市民力」の形成を目指し、「人間福祉」を核とする優れた社会起業能力の養成を行う。  <b>人間科学科</b> 人間をこころ(スピリチュアリティ)と身体を持つ存在として理解し、社会の中で生きる人の問題を見出し、自己と人々の自己実現を支援するための価値・知識・技術の総体について教育することを目的とする。ここから得られた人間理解に基づき、専門職として人の自己実現やその支援に関わる実践家を育成し、さらに一般市民として地域社会の中でこころと身体の健康に貢献できる人材を育成することを重要なミッションとする。	有・ <input checked="" type="radio"/>
学位授与方針(DP)	変更の有無
Kwansei コンピテンシーの獲得を念頭において、人間福祉学部の DP を以下のとおり定める。  <社会福祉学科> 1. 大学生にふさわしい基礎力を身につけている 2. 人間と社会とその交互作用に関する基本的知識を身につけている 3. 人間の生活課題を共感的に理解し、幅広い視野から実践的な解決法を考えることができる 4. 社会福祉学科の学生は、社会福祉学に関する専門的知識を身につけ、社会福祉課題の解決に関与し貢献できる  <社会起業学科> 1. 大学生にふさわしい基礎力を身につけている 2. 人間と社会とその交互作用に関する基本的知識を身につけている 3. 人間の生活課題を共感的に理解し、幅広い視野から実践的な解決法を考えることができる 4. 社会起業学科の学生は、社会起業に関する専門的知識を身につけ、グローバルな市民社会の建設に関与し貢献できる  <人間科学科> 1. 大学生にふさわしい基礎力を身につけている 2. 人間と社会とその交互作用に関する基本的知識を身につけている 3. 人間の生活課題を共感的に理解し、幅広い視野から実践的な解決法を考えることができる 4. 人間科学科の学生は、人間科学に関する専門的知識を身につけ、質の高い生活と社会の実現に貢献できる	有・ <input checked="" type="radio"/>
教育課程の編成・実施方針(CP)	変更の有無
<社会福祉学科>  1. 大学生にふさわしい基礎力の修得(キリスト教教育科目/言語教育科目/教養教育科目) (1)キリスト教に関する基礎的知識と社会貢献の態度を身につけている (2)人間と社会に関する教養を身につけている (3)英語で情報を収集し、個人や社会に向けて発信することができる (4)外国語または日本手話に関する基礎的知識を身につけ、基本的なコミュニケーションができる (5)多様な文化に関心をもち、それを理解する態度を身につけている (6)ワープロ、表計算、プレゼンテーション用PCソフトを用いることができる (7)文献、統計、資料などの検索と読解のための基礎力を身につけている (8)レポートを書き、プレゼンテーションをすることができる (9)ディスカッションに参加し、自分の意見を述べる  2. 社会福祉学に関する専門的知識・技能・態度の修得(社会福祉学科専門教育科目) (1)人間と社会とその交互作用についての基礎的知識と課題解決への意欲を身につけている (2)日本および世界の社会福祉の歴史と理念を理解している (3)日本の社会福祉および社会保障制度の概要を理解している (4)ソーシャルワークの理論と実践について、基本的な知識、技能及び態度を身につけている (5)専門ソーシャルワークの理論と実践について発展的な知識、技能及び態度を身につけている (6)ソーシャルワークに関連する専門分野について基礎的知識を身につけている (7)社会福祉およびソーシャルワークの視点で生活課題および心理社会的現象をとらえ、関連領域の視点も活用しながら実践方法を考えることができる	有・ <input checked="" type="radio"/>

<p>3. 研究課題に関する研究実施能力の修得(研究演習・卒業研究)</p> <p>(1) 研究課題に関して、資料を収集し、実験、測定、調査、実践を行い、分析する能力を身につけている</p> <p>(2) 研究課題に関して、レポートまたは論文が書ける</p> <p>4. 学科の専門性と関連する領域における発展的な知識、技能、態度の修得(自由選択科目)</p> <p>(1) 総合教育科目・専門教育科目・全学科目・他学部科目の中から自己の専門性と関連する科目を見つけて自ら学びを計画できる</p> <p>(2) 総合教育科目・専門教育科目・全学科目・他学部科目を活用して自分の専門性を発展させることができる</p> <p>&lt;社会起業学科&gt;</p> <p>1. 大学生にふさわしい基礎力の修得(キリスト教教育科目/言語教育科目/教養教育科目)</p> <p>(1) キリスト教に関する基礎的知識と社会貢献の態度を身につけている</p> <p>(2) 人間と社会に関する教養を身につけている</p> <p>(3) 英語で情報を収集し、個人や社会に向けて発信することができる</p> <p>(4) 外国語または日本手話に関する基礎的知識を身につけ、基本的なコミュニケーションができる</p> <p>(5) 多様な文化に関心を持ち、それを理解する態度を身につけている</p> <p>(6) ワープロ、表計算、プレゼンテーション用PCソフトを用いることができる</p> <p>(7) 文献、統計、資料などの検索と読解のための基礎力を身につけている</p> <p>(8) レポートを書き、プレゼンテーションをすることができる</p> <p>(9) ディスカッションに参加し、自分の意見を述べる事ができる</p> <p>2. 社会起業に関する専門的知識・技能・態度の修得(社会起業学科専門教育科目)</p> <p>(1) 人間と社会とその相互作用についての基礎的知識と課題解決への意欲を身につけている</p> <p>(2) 多様な社会的課題に対する理解と認識を身につけている</p> <p>(3) グローバルな視点を身につけている</p> <p>(4) 社会的課題に対するさまざまな取り組みに関する知識と方法について理解している</p> <p>(5) 社会起業の理念に関する基本的知識を理解している</p> <p>(6) 社会起業の基本的概念を理解している</p> <p>(7) 社会起業の実践のための専門的知識、技法、経験及び態度を身につけている</p> <p>(8) 社会起業に関連する専門分野についての基礎的知識を身につけている</p> <p>(9) 社会起業に関する情報の収集と活用に必要な知識、技法、経験を身につけている。</p> <p>3. 研究課題に関する研究実施能力の修得(研究演習・卒業研究)</p> <p>(1) 研究課題に関して、資料を収集し、実験、測定、調査、実践を行い、分析する能力を身につけている</p> <p>(2) 研究課題に関して、レポートまたは論文が書ける</p> <p>4. 学科の専門性と関連する領域における発展的な知識、技能、態度の修得(自由選択科目)</p> <p>(1) 総合教育科目・専門教育科目・全学科目・他学部科目の中から自己の専門性と関連する科目を見つけて自ら学びを計画できる</p> <p>(2) 総合教育科目・専門教育科目・全学科目・他学部科目を活用して自分の専門性を発展させることができる</p> <p>&lt;人間科学科&gt;</p> <p>1. 大学生にふさわしい基礎力の修得(キリスト教教育科目/言語教育科目/教養教育科目)</p> <p>(1) キリスト教に関する基礎的知識と社会貢献の態度を身につけている</p> <p>(2) 人間と社会に関する教養を身につけている</p> <p>(3) 英語で情報を収集し、個人や社会に向けて発信することができる</p> <p>(4) 外国語または日本手話に関する基礎的知識を身につけ、基本的なコミュニケーションができる</p> <p>(5) 多様な文化に関心を持ち、それを理解する態度を身につけている</p> <p>(6) ワープロ、表計算、プレゼンテーション用PCソフトを用いることができる</p> <p>(7) 文献、統計、資料などの検索と読解のための基礎力を身につけている</p> <p>(8) レポートを書き、プレゼンテーションをすることができる</p> <p>(9) ディスカッションに参加し、自分の意見を述べる事ができる</p> <p>2. 人間科学に関する専門的知識・技能・態度の修得(人間科学科専門教育科目)</p> <p>(1) 人間と社会とその相互作用についての基礎的知識と課題解決への意欲を身につけている</p> <p>(2) 「こころ(スピリチュアリティ)と身体」の両面から人間を理解する態度とそのための専門的知識を身につけている</p> <p>(3) 人間のライフコースの各段階(乳・幼児、少年期、青年期、成人期、壮年期、高齢期)における課題や理論について「こころ(スピリチュアリティ)と身体」の両面から理解している</p> <p>(4) 人間の生き方やいのちについて、広い視野から理解している</p> <p>(5) こころ(スピリチュアリティ)についての専門的知識と援助技術を身につけている</p> <p>(6) 身体に関わる科学的専門知識と技術を身につけている</p> <p>3. 研究課題に関する研究実施能力の修得(研究演習・卒業研究)</p> <p>(1) 研究課題に関して、資料を収集し、実験、測定、調査、実践を行い、分析する能力を身につけている</p> <p>(2) 研究課題に関して、レポートまたは論文が書ける</p> <p>4. 学科の専門性と関連する領域における発展的な知識、技能、態度の修得(自由選択科目)</p> <p>(1) 総合教育科目・専門教育科目・全学科目・他学部科目の中から自己の専門性と関連する科目を見つけて自ら学びを計画できる</p> <p>(2) 総合教育科目・専門教育科目・全学科目・他学部科目を活用して自分の専門性を発展させることができる</p>	<p>変更の有無</p>
<p>学生の受け入れ方針(AP)</p> <p>【関西学院大学(学士課程)】(2023年度入学生)</p> <p><b>I. 関西学院大学アドミッション・ポリシー</b></p> <p>世界を視野におさめ、他者(ひと)への思いやりと社会変革への気概を持ち、高い識見と倫理観を備えて自己を確立し、自らの大きな志を持って行動力を発揮する“Mastery for Service”を体現する世界市民を育成することが関西学院のミッションです。</p> <p>関西学院大学は、このミッションに共感し、大学での学びや諸活動の中で、自分への挑戦をし続ける意欲にあふれ、さまざまな適性を有する多様な背景をもった学生・生徒を世界のあらゆる地域から受け入れます。</p>	<p>④・無</p>

そのために、これまでに培われた確かな基礎学力、活動や経験を通じて身に付けた資質、能力、学ぶ意欲や人間性などを、多様な入試制度により多角的に評価することを基本的な方針としています。

## Ⅱ. 学部のアドミッション・ポリシー

人間福祉学部では、人間とその生活環境としての社会、そして両者の相互作用を全体的に捉えながら、「質の高い生活と社会」の実現に向けて貢献できる人材の育成を目指します。そのための基本理念として「3つのC」、すなわち「人への思いやり(Compassion)」、「幅広い視野(Comprehensiveness)」、「高度な問題解決能力(Competence)」をすべての学科に共通するキー・コンセプトとして位置づけています。

一般選抜ではこの理念や教育プログラムにふさわしい生徒を確保するために、「高校において基本とするような科目全体について一定の学力を持っているか、特に言語的能力があり理解力や論述力に優れているか、あるいは特に数理的な能力に優れているか」との観点から試験を実施します。

なお、本学部の入学にあたって、社会福祉学科は、「社会福祉にかかわる分野での職業選択を希望しているかその分野に理解がある」ことが、社会起業学科は、「社会起業に関心があり、国内外での社会貢献活動をめざしているかそのような分野に理解がある」ことが、人間科学科は、「死生学・生命倫理学・悲嘆学などのところ(スピリチュアリティ)に関する学問に関心があるか、身体(スポーツ・健康)に関連する分野に関心があり、それぞれの分野での職業選択を希望しているかそれらの分野に理解がある」ことが求められます。

以上の項目を募集方針の要素として、教科・科目を設定して筆記試験を中心とする一般選抜と、面接(口頭試問)等を探り入れた学校推薦型選抜・総合型選抜を実施しています。高等学校における基礎学力の「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」を、それぞれの入学試験において重み付けを行い評価しています。

## Ⅲ. 入学試験毎のアドミッション・ポリシー

### 1. 一般選抜

一般選抜は、各学部での教育に必要な「総合的な学力を持つ受験生を選抜する」ものです。

一般入学試験では各学部の教育理念・目標に基づき試験教科・科目、配点を設定し、筆記試験により関西学院大学で学ぶために必要な学力「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」を判定するための問題を独自に作成しています。

全学部日程の文系入学試験では本学で学ぶために必要な「英語」「国語」を必須とし、「日本史」「世界史」「地理」「数学(記述式)」を選択科目とし筆記試験を実施します。全学部日程の国際学部については、高い英語能力を有する生徒を評価するため、「英語」に特化した「英語」「英語論述」による入学試験も実施しています。

学部個別日程の文系入学試験では本学で学ぶために必要な「英語(記述式含む)」「国語(記述式含む)」を必須とし、「日本史」「世界史」「数学(記述式)」を選択科目とし筆記試験を実施します。なお文学部・法学部では「日本史」「世界史」「数学(記述式)」に加えて「地理」を選択科目に加えています。人間福祉学部については学部個別日程において「英語(記述式含む)」「国語(記述式含む)」の2科目による筆記試験を行っています。

理系入学試験においては全学部日程を2日間実施、入試制度も2種類実施しています。総合型および数学・理科重視型においては、本学で学ぶために必要な「英語」「数学(記述式)」を必須とし、理科(記述式)「物理」「化学」「生物」のいずれかを選択する筆記試験を実施しています。

一般入学試験共通テスト併用日程／英数日程は、英語・数数学型、共通テスト併用型・英語、共通テスト併用型・数学の3方式を実施しています。英語・数数学型は、関西学院大学の「英語(記述式含む)」と「数学(記述式)」による筆記試験を実施し、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」を判定しています。共通テスト併用型・英語、共通テスト併用型・数学は、関西学院大学の「英語(記述式含む)」または「数学(記述式)」に、大学入学共通テストの教科・科目の得点を加味し、各学部で学ぶための学力と総合的な基礎学力を有する生徒を選抜するために実施しています。

大学入学共通テストを利用する入学試験は、「一般入学試験とは異なるタイプの受験生を受け入れるための入試制度」と位置づけています。大学入学共通テストで実施している教科・科目の筆記試験をもとに、本学で学ぶために必要な総合的な基礎学力を「知識・技能」を中心に判定を行い、大学入学共通テストの得点のみで合否判定を行います。

1月出願においては、総合政策学部3科目英数型を除く文系学部は「外国語」「国語」を必須として、「数学」「理科」「地理歴史」「公民」から高得点を採用する方式を3科目型、5科目型の方式で実施します。また「外国語」「国語」「数学」「地理歴史・公民」「理科」を必須とする7科目型を実施します。理系学部は「英語」「数学」を必須として各学科の学びに必要な科目について必須科目もしくは選択科目として加え、高等学校における各教科の基礎学力のうち「知識・技能」を評価します。また、3月出願においては、文系学部は「英語」を必須とし、「国語」「数学」「理科」「地理歴史」「公民」から高得点科目を採用する方式を実施しています。理系学部は「英語」「数学」を必須として各学科の学びに必要な科目について必須科目もしくは選択科目として加え、高等学校における各教科の基礎学力のうち「知識・技能」を評価します。

また、大学入学共通テストを利用する入学試験(1月出願 3科目型(英語資格・検定試験利用))、大学入学共通テストを利用する入学試験(1月出願 5科目型(英語資格・検定試験利用))は、「読む」「書く」「聞く」「話す」の英語の4技能を身に付けた生徒を選抜するために、提出された書類のうち英語資格・検定試験のスコアを出願資格として高く評価し、大学入学共通テストの教科・科目の得点を活用して実施する入学試験であり、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」を得点として評価し、検定試験に取り組んだ「主体性」を高く評価します。

### 2. グローバル入学試験

グローバル入学試験は、入学後、本学のスーパーグローバル大学創成事業における国際教育プログラム(国際教育プログラム)に積極的に取り組むことを希望する生徒や、将来、国際的な活躍を目指す生徒を対象に3つのカテゴリーで実施する入学試験です。

#### ① 国際的な活躍を志す者を対象とした入学試験

関西学院大学のアドミッション・ポリシーに基づき、本入学試験では、英語能力に加え、留学経験、模擬国連での活動など、自ら国際的な活動に取り組んだ実績を有し、国際的課題解決のための提案・実践に意欲を有するとともに、その国際的な活動で培った力を関西学院大学の国際教育プログラム(国際教育プログラム)に挑戦することでさらに発展させ、国際社会で活躍できる力を身に付けることを志す者を求めています。

第1次審査では、書類審査および筆記審査を行い、「主体性」「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」を総合的に評価します。

第2次審査では、学部毎に実施する面接(口頭試問含む)により、志望学部における学びの意欲や学びの計画、人間性などを評価します。

#### ② インターナショナル・バカロレア入学試験

関西学院大学のアドミッション・ポリシーに基づき、本入学試験では、国際的に認められた大学入学資格であるインターナショナル・バカロレアDP(ディプロマ・プログラム)の課程を修了後、統一試験に合格し、インターナショナル・バカロレア資格を有するとともに、入学後は、本学のインターナショナル・プログラム(国際教育プログラム)を通して、国際社会で活躍する能力を身に付けることを志す者を求めています。

第1次審査では、書類審査および筆記審査を行い、「主体性」「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」を総合的に評価します。

第2次審査では、学部毎に実施する面接(口頭試問含む)により、志望学部における学びの意欲や学びの計画、人間性などを評価します。

#### ③ 帰国生徒入学試験

関西学院大学のアドミッション・ポリシーに基づき、本入学試験では、家庭の事情等により海外に長期間滞在し、海外の教育を受けた者で、日本での生活や短期間の留学では身に付けることのできない主体性や価値観、多角的視点、困難を乗り越えた経験などを持ち、それらを本学での学生生活や学びに生かそうとする者を求めています。多様な背景を持つ学生が集い刺激し合うことで、キャンパスが活性化する教育的効果も望んでいます。さらに、帰国生徒が他の学生と相互交流を通して学識や人間性をより一層高め、将来の日本および世界を支えていく真の国際人として成長することにも期待します。

第1次審査では、筆記審査を行い、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」を評価します。

第2次審査では、学部毎に実施する面接(口頭試問含む)により、志望学部における学びの意欲や学びの計画、人間性などを評価します。

### 3. 推薦入学

推薦入学は高等学校長の責任ある推薦により本学で学ぶために必要な学力を有する生徒を受け入れるものです。審査においては調査書、自己推薦書、志望理由書、学校長推薦書等の提出書類による書類審査と面接(口頭試問含む)を通じて、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」を多面的・多元的に評価します。

#### ①院内推薦入学

##### 1) 関西学院高等部

関西学院高等部推薦入学は関西学院の一貫教育の大きな柱として位置づけられています。高等部でキリスト教主義教育による関西学院の建学の精神のもとに学んだ生徒を受け入れることにより、大学進学後もそれぞれの学部において、正課、課外活動、学内諸活動の面で学生の核となり、他の入学者に対しても良い影響を与え関西学院の学風を担うことを期待し実施するものです。審査では志願提出書類の書類審査と面接(口頭試問含む)を通じて、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」を多面的・多元的に評価します。

##### 2) 関西学院千里国際高等部

関西学院千里国際高等部推薦入学は、千里国際高等部の特色である国際教育と、キリスト教主義教育による関西学院の建学の精神のもとに学んだ生徒を受け入れることにより、大学進学後もそれぞれの学部において、正課、課外活動、学内諸活動の面で学生の核となり、関西学院大学の活性化に寄与することを期待し実施するものです。審査では志願提出書類の書類審査と面接(口頭試問含む)を通じて、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」を多面的・多元的に評価します。

#### ②継続校(啓明学院高等学校)推薦入学

啓明学院継続校推薦入学は、キリスト教主義教育により学んだ啓明学院高等学校の生徒を受け入れることにより、大学進学後もそれぞれの学部において、正課、課外活動、学内諸活動の面で学生の核となり、関西学院大学の活性化に寄与することを期待し実施するものです。審査では志願提出書類の書類審査と面接(口頭試問含む)を通じて、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」を多面的・多元的に評価します。

#### ③提携校推薦入学

関西学院大学提携校推薦入学は、個性的でかつ高い資質をもつ生徒を受け入れるために実施しています。関西学院の建学の精神および教育理念を理解し、高等学校校独自の特色を活かした優れた教育プログラムによって学んだ生徒を受け入れるものです。審査では志願提出書類の書類審査と面接(口頭試問含む)を通じて、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」を多面的・多元的に評価します。

#### ④協定校推薦入学

##### 1) キリスト教学校枠

関西学院大学協定校推薦入学は、高等学校のキリスト教主義教育により学び、個性的でかつ高い資質をもつ生徒を受け入れるために実施しています。関西学院の建学の精神および教育理念を理解し、高等学校校独自の特色を活かした優れた教育プログラムによって学んだ生徒を受け入れるものです。審査では志願提出書類の書類審査と面接(口頭試問含む)を通じて、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」を多面的・多元的に評価します。

##### 2) グローバル枠

関西学院大学協定校推薦入学は、個性的でかつ高い資質をもつ生徒を受け入れるために実施しています。21世紀的な教育目標であるグローバルな観点に立って国際社会に貢献できる人材として、関西学院の建学の精神および教育理念を理解し、高等学校校独自の特色を活かした優れた教育プログラムによって学んだ生徒を受け入れるものです。審査では志願提出書類の書類審査と面接(口頭試問含む)を通じて、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」を多面的・多元的に評価します。

##### 3) グローバル+キリスト教校枠

関西学院大学協定校推薦入学は、21世紀的な教育目標であるグローバルな観点に立って国際社会に貢献できる人材として、高等学校のキリスト教主義教育により学び、個性的でかつ高い資質をもつ生徒を受け入れ、関西学院の建学の精神および教育理念を理解し、高等学校独自の特色を活かした優れた教育プログラムによって学んだ生徒をも受け入れるために実施するものです。審査では志願提出書類の書類審査と面接(口頭試問含む)を通じて、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」を多面的・多元的に評価します。

#### ⑤指定校推薦入学

指定校推薦入学は一定の学力を有する生徒を高等学校長の責任に基づく推薦を受け、書類審査・面接(口頭試問含む)によって総合的に評価し受け入れるための制度です。出願書類と面接(口頭試問含む)において、一定水準以上の「知識・技能」、各学部で学ぶために必要な「思考力・判断力・表現力」や「主体性・多様性・協働性」が備わっているか等を評価し、入学後の勉学における明確な志向および意欲の評価に重点を置き総合的に審査しています。

#### 人間福祉学部

関西学院大学人間福祉学部において勉学することに強い意欲をもち、成績優秀で個性豊かな生徒を求め、本学の建学の精神に基づき、将来性ある人物を育成することを目的とします。審査では志願提出書類、面接(口頭試問含む)を通じて、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」を多面的・多元的に評価します。

#### ⑥指定校推薦編入学

指定校推薦編入学は、一定の学力「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」を有する学生を学長の責任に基づく推薦を受け、書類審査・面接(口頭試問含む)によって各学部において学ぶ意欲等を総合的に評価し受け入れるための制度です。

#### 4. 探究評価型入学試験

関西学院大学のアドミッション・ポリシーに基づき、本入学試験では、横断的・総合的な学習や探究的な学習を通して、自ら課題を発見し、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を持ち、多様な人々と協働して学ぶことが出来る者を求めています。

第1次審査では、探究活動の成果物含む提出書類を審査し、主体性や協働性、課題発見・解決能力、また、本学で学ぶにふさわしい「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」を評価します。

第2次審査では、学部毎に実施する面接(口頭試問含む)や探究活動に関するプレゼンテーション等で探究活動のプロセスや自己の成長、入学後の志望学部での学びの意欲や学びの計画などを評価します。

#### 5. UNHCR難民高等教育プログラムによる推薦入学

「UNHCR難民高等教育プログラムによる推薦入学」は、関西学院大学と国連難民高等弁務官(UNHCR)駐日事務所および国連UNHCR協会との協定に基づき実施する入学制度です。これは本学の建学の精神に基づく「人類の幸福と平和に資する世界市民の育成」を現代に即したかたちで実現するためのものです。

日本で生活する難民の方々は、厳しい環境下におかれています。特に教育面では、本人や家族の経済的事情や、母国での出身校の卒業証明が得られないなどの理由で、高等教育を受ける機会を失っている場合が少なくありません。それが就労条件の悪化、さらには、経済的事情の悪化につながっています。

こうした状況を少しでも改善することを目的とするこの推薦入学制度で入学した生徒が、高い教養と専門性を身につけ、将来、日本、母国あるいは国際社会において平和の構築や社会の発展を支える人材へと成長することが期待されています。また関西学院大学で共に学ぶ他の学生にとっても、迫害や戦争といった国際社会が抱える問題を身近に捉えるとともに、日本国内の国際化を意識する機会となります。

国連難民高等弁務官(UNHCR)駐日事務所および国連UNHCR協会の推薦に基づき、面接及び口頭試問を行い本学で学ぶ意欲を中心にしながら「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」について評価を行います。

#### 6. スポーツ選抜入学試験

関西学院大学のアドミッション・ポリシーに基づき、本入学試験では、スポーツ活動において優れた能力と競技実績を有し、入学後に学業とスポーツ活動を両立させる強い意欲をもつ者を積極的に受け入れ、本学における教育の活性化とスポーツ活動の一層の振興に寄与することを目指しています。

第1次審査では、書類審査にてスポーツ活動における実績を評価するとともに、筆記審査にて、本学で学ぶにあたっての基礎学力、知識、表現力、論理的思考力を評価します。

第2次審査では、学部毎に実施する面接(口頭試問含む)等により、志願する学部で学ぶ意欲を中心に評価を行います。

#### 7. 外国人留学生入学試験

本学は、米国南メソジスト監督教会の宣教師、W. R. ランバスによって創設されました。開学当初から多くの外国人教員が教鞭をとっていたこともあり、外国人留学生を古くから受け入れ、日本の大学の中では国際色豊かな大学としてその学風を育んできました。


この入学試験制度は外国人留学生を対象とし、さまざまな国からの留学生を受け入れることにより、大学の国際性を一層高め、ひいてはキャンパスの活性化を図る教育的効果も期待した、いわゆる「多元的入試」の一環として実施されます。

出願時の提出書類に基づき審査を実施し、本学で学ぶにあたって必要な日本語力および、基礎学力を有しているかを審査した後、各学部が面接審査(口頭試問を含む)・筆記試験等を実施し、志願する学部で学ぶ意欲や人間性などを中心に評価し、出願時提出書類と合わせて総合的に判断し、選抜します。

#### 8. 学部特色入学試験

関西学院大学のアドミッション・ポリシー、また、各学部が定めるアドミッション・ポリシーに基づき、各学部が求める多様な能力、様々な経験や活動を通じて身につけた豊かな人間性をもった学生を求めています。

#### 人間福祉学部

<p>人間福祉学部は、関西学院大学のなかで伝統のある「社会福祉」の分野をさらに進化させ、「人間そのもの」そして「その生活環境としての社会」について理解を深め、よりよい社会の実現をめざして学ぶ学際的分野をテーマとする実学志向の学部です。</p> <p>社会福祉学科では、社会的支援の必要な人の自立や自己実現への支援、社会福祉に関する政策や実践を学び、未来の社会福祉を担うソーシャルワーカーとしてリーダーシップを発揮できる人、社会起業学科では、国際的な視点とコミュニケーション能力を養い、地域社会や国際社会に貢献できる行動力と知識を身につけ、社会起業とともに企業、自治体、NPO・NGO、国際機関などで社会のあり方を提案できる人、人間科学科では、人間を「こころ(スピリチュアリティ)」と「身体」の両面からとらえ、「こころ」や「身体」を病む人や悲しみの中にある人に寄り添い、人々のQOL(いのちの質・生活の質)を支える人を育成します。</p> <p>学部特色入試では、基礎的な学力に加えて、社会貢献活動、文化・芸術活動の実績、体験・経験、創造力、能力・資格、リーダーシップなどで特色を持つ者、豊かな人間性と学ぶ意欲を持ち、誰ひとり取り残さない社会をめざす者を積極的に受け入れます。</p> <p>審査は書類審査・筆記審査・面接審査を通じて、学力「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」を多面的・多角的に評価します。書類審査においては提出された書類や調査書に基づき、高等学校での学びや活動の成果から「主体性・多様性・協働性」などを中心に評価を行います。筆記審査においては日本語資料による読解・論述審査、英語資料による読解・論述審査を行い「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」を中心とした学力を評価します。さらに面接審査においては上述の本学部で学ぶ意欲を中心に総合的に評価を行います。</p>	
<p>学生支援に関する方針</p>	<p>変更の有無</p>
<p>多様な学生に対する支援</p> <p><b>修学支援</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. アカデミックアドバイザー制度 アカデミックアドバイザーを任命し、同アドバイザーが事務職員と協働で、定めた期間内に1年生及び2年生の成績不振学生への個別指導(個別相談による学修指導及びその他これに付随する指導)を行う。</li> <li>2. キャンパスライフアドバイザー制度 学生が演習(基礎演習、研究演習)に所属しない期間の学生生活に関わる相談窓口として、キャンパスライフアドバイザーを配置する。 アドバイザーは当該学生の基礎演習担当教員とする。</li> <li>3. 要配慮学生への支援 毎学期初めに障害や疾病等のため授業中に配慮が必要な学生を把握し、配慮の内容について当該学生・教員・事務局間でコンセンサスを取る。それに基づき、各授業担当者に配慮依頼文書を渡すとともに、教授会でも情報共有を行う。定期試験においても必要に応じて適切な配慮を講じる。また、適宜総合支援センターと連携を取る。以上を円滑に進めると同時に、新たな状況に対応するために学部障害学生支援委員会を設けている。</li> <li>4. 実践教育支援室の設置 実習、フィールドワーク、インターンシップ等の実習プログラムに参加する学生への支援組織として、実践教育支援室を設置している。経験豊富な専門スタッフ(人間福祉実習助手)が常駐し、各プログラムの事前準備や心構え、実施中の支援、事後の振り返り等をサポートするとともに、施設・機関とのコーディネートを行い、現場の指導者、本学担当教員、学生の3者の連携に注力し、学生の修学支援を行う。</li> <li>5. 奨学金 「荒川義子奨学金規程」により、社会福祉士及び精神保健福祉士国家試験受験資格取得に必要な実習科目を履修する学生に対して経済的支援を行う。また、「人間福祉学部海外語学研修奨学金規程」により、社会起業学科が実施する海外語学研修(社会起業英語中期留学)に参加する学生のうち要件を満たす者に対して奨学金を支給する。</li> </ol> <p><b>生活支援</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. キャンパスライフアドバイザー制度 学生が演習(基礎演習、研究演習)に所属しない期間の学生生活全般に関わる相談窓口として、キャンパスライフアドバイザーを配置する。アドバイザーは当該学生の基礎演習担当教員とする。</li> <li>2. 要配慮学生への支援 毎学期初めに障害や疾病等のため授業中に配慮が必要な学生の把握に努め、教授会で共有を行う。授業中の配慮を各担当者に依頼するとともに、学生生活の部分については、総合支援センターと綿密な連携を取る。以上を円滑に進めると同時に、新たな状況に対応するために学部障害学生支援委員会を設けている。</li> </ol> <p><b>進路支援</b></p> <p>実践教育支援室が社会福祉士及び精神保健福祉士国家試験受験資格取得に関わる指導(サポート)や、就職(福祉職)に関わる情報提供を行う。</p>	<p>有・</p>
<p>教員像</p>	<p>変更の有無</p>
<p>・学生の志を受けとめ、その成長を喜びとして、それぞれ学生が自らの潜在能力を可能な限り開花できるよう、真摯に教育に取り組む姿勢を持つ。 ・専門分野においては、自らの研究課題に向き合い、誠実に継続的に探究し、その成果を広く発信して社会に貢献できるような高い研究能力を持つ。 ・組織の発展、継続のために、自らの持つ力を活用し、また多くの教職員と共に協働・連携して課題に取り組む姿勢を持つ。</p>	<p>有・</p>
<p>教員組織の編制方針</p>	<p>変更の有無</p>
<p>人間福祉学部の理念・目的、人材養成に関する目的、ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシーに照らして、適切な専門分野・経験等を持つ教員を、人数・年齢構成・男女比等の観点から、職位・雇用条件に鑑みて、適切に配置するための手続きを明確化、透明化する。</p>	<p>有・</p>

2. 実施計画

(1) 必須型

実施計画(タイトル)	1-(1)-① 「Kwansei コンピテンシー」の策定と運用			帳票の有無	不要
内容	本大学は、大学として「学部の区別なく学生が共通に身に付けるべき知識・能力・資質」(「Kwansei コンピテンシー」)を時代に即して新たに定め、各学部はそれを土台に「各分野における学位授与に必要な知識・技能」であるDP(ディプロマポリシー)を再策定する。 また、策定された「Kwansei コンピテンシー」を基に大学として「学部の区別なく学生が共通に身に付けるべき知識・能力・資質」の到達状況を測定、評価する取組を推進する。				
学部独自の取り組み内容					
<指標 1>					
年度毎の目標	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度	
目標					
実績					
年度毎の目標	※学部における毎年度の本帳票の作成および学内各種会議体での点検・評価、改善活動などにより、内部質保証システムの PDCA サイクルを確立する。				
目標					
実績					
<指標 2>					
年度毎の目標	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度	
目標					
実績					
年度毎の目標	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度	
目標					
実績					
【2022 年度の進捗状況・今後の取り組み】					

実施計画(タイトル)	1-(1)-② 三つのポリシーに基づく教学マネジメントの推進(3ポリシーの見直し・検証、カリキュラム見直し・拡充、カリキュラムマップの整備)			帳票の有無	不要
内容	<p>本学は、大学として「学部の区別なく学生が共通に身に付けるべき知識・能力・資質」(「Kwansei コンピテンシー」)を時代に即して新たに定め、各学部・研究科はそれを土台に「各分野における学位授与に必要な知識・技能」であるDP(ディプロマポリシー)を策定する。このDPは、すべての学生が卒業/修了必要単位数を取得した段階で修得しているべき学修成果を表したものである。この基本原理を守るべく、学部・研究科は(a)DPの再確認(b)DPとCP(カリキュラムポリシー)の整合(c)シラバスの実質化(d)シラバスに沿った成績評価(e)DPとAP(アドミッションポリシー)の連動、を厳格に運用する。</p> <p>本学はこうした学部/研究科による三つのポリシーに基づく教学マネジメントを統括し、大学全体の内部質保証を推進することで、卒業する全ての学生の質を保証する。</p>				
学部独自の取り組み内容	カリキュラム委員会・入試制度検討委員会・教授会等の会議体において、3つのポリシーに基づく教学マネジメントについて、検証・検討する機会を設けている。				
<指標1>	3つのポリシーに基づく教学マネジメントの検証と検討				
年度毎の目標	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	
目標	カリキュラム委員会・入試制度検討委員会・教授会等の会議体において検証し検討する。	カリキュラム委員会・入試制度検討委員会・教授会等の会議体において検証し検討する。	カリキュラム委員会・入試制度検討委員会・教授会等の会議体において検証し検討する。	カリキュラム委員会・入試制度検討委員会・教授会等の会議体において検証し検討する。	
実績	2020年度第11回教授会(1月19日開催)において、3つのポリシーに基づく教学マネジメントについて、検証し、意見交換を行った。	2021年度第10回教授会(12月8日開催)において、3つのポリシーに基づく教学マネジメントについて、検証し、意見交換を行った。	2022年度第9回教授会(12月7日開催)において、3つのポリシーに基づく教学マネジメントについて、検証し、意見交換を行った。		
年度毎の目標	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度	
目標	カリキュラム委員会・入試制度検討委員会・教授会等の会議体において検証し検討する。	カリキュラム委員会・入試制度検討委員会・教授会等の会議体において検証し検討する。	カリキュラム委員会・入試制度検討委員会・教授会等の会議体において検証し検討する。	カリキュラム委員会・入試制度検討委員会・教授会等の会議体において検証し検討する。	
実績					
<指標2>	新カリキュラムの学修成果を検証する。				
年度毎の目標	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	
目標					
実績					
年度毎の目標	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度	
目標	カリキュラム委員会等の会議体において評価・検証し、必要に応じて改善を検討する。	カリキュラム委員会等の会議体において評価・検証し、必要に応じて改善を検討する。	カリキュラム委員会等の会議体において評価・検証し、必要に応じて改善を検討する。	カリキュラム委員会等の会議体において評価・検証し、必要に応じて改善を検討する。	
実績					
<p><b>【2022年度の進捗状況・今後の取り組み】</b></p> <p>2016年度より新カリキュラム検討ワーキング・グループ(WG)を立ち上げ、WG・学科連絡会・カリキュラム委員会を中心に人間福祉学部における現行カリキュラムの課題を検証し、新カリキュラム案を検討・整備し、2020年度入学生より新カリキュラムを導入した。</p> <p>なお、カリキュラム改正は各学科連絡会・カリキュラム委員会にて検討、2025年度に新カリキュラム導入を目指して協議検討をつづけることとなった。また、2022年度第9回教授会にて、3つのポリシーを確認し、人間福祉学部における課題についての意見交換を行った。今後も継続的に、カリキュラム委員会・入試制度検討委員会・教授会等の会議体において3つのポリシーに基づく教学マネジメントについて、検証し検討する。</p>					



実施計画(タイトル)	1-(9)-① 入試制度改革への対応		帳票の有無	不要
内容	<p>グローバル化や情報化の進展、少子高齢社会の到来など社会の在り方が急速に変わり、予測が難しい状況の中で、自ら問題を発見し、他者と協力して解決していくための力が必要とされており、2015年1月に文部科学省より「高大接続改革実行プラン」が発表され、高大接続改革は、「高校教育」「大学教育」そしてそれをつなぐ「大学入学者選抜」の一体的な改革で、それぞれについて様々な施策が進んでいる。「大学入学者選抜改革」においては、これまで以上に多面的・総合的に人物を評価する入試への転換を掲げ、大学入試センター試験を廃止し、思考力・判断力・表現力を一層重視した「大学入学共通テスト」を2020年度(2021年1月実施)より導入。大学入学共通テストでは、国語と数学に記述式問題を導入すること、英語については4技能を適切に評価するため民間の資格・検定試験を活用することが決まっている。また、各大学の個別選抜では、アドミッション・ポリシーの明確化とともに、より多面的な選抜方法にすることが求められている。一方、AO入試や推薦入試では、一部で「学力不問になっている」といった批判があることから、小論文やプレゼンテーション、大学入学共通テストなどを通じて、学力を問う試験を必須化する方針も示されている。</p> <p>このような状況において、本学においては学長が入試委員長として全学部長が入試委員となる入試委員会が中心となり、以下のような入試制度改革を進めていく。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 高大接続改革で求められる入試制度改革への対応 上記の改革を進めるため、本学ではすべての入試において「学力3要素」を評価する入試へと変えていく。また、SGUでもある本学においてはすべての入試において英語の4技能を評価する入試へと変えていく。合わせて、各種入試においても、現行や一芸入試的な色合いの濃いAO入試においては高等学校での活動をしっかりと評価する入試への変更を、そして、現行SGH・SSH指定校に限定している公募推薦入試も課題研究を実践しているすべての高等学校に拡大し、高等学校での探究活動を評価する入試へと変更させていく。</li> <li>2. 現行入試制度・募集人員の再検討 上記のような国の高大接続改革が進むと、例えば、国公立大学ではAO入試の割合が増加する。また、18歳人口の減少という人口構造の変化(少子化)により、より一層前倒し(各種入試への定員のシフト)によって学生を確保する必要が生じる。今後、各種入試と一般入試の定員比率の再検討とともに、各種入試の定員の見直しを進める必要がある。</li> <li>3. 主体性等を評価するための入試体制強化やアドミッションオフィサー配置 上記のとおり、今後の大学入試においては、学力3要素を評価するため、小論文やプレゼンテーション、課題研究論文、面接や調査書など高等学校への学びをひとりひとり丁寧に評価する入試が拡大してくる。それに伴って当然、これまで入試選抜を担ってこられた教員だけでは対応することが困難となる。そのため、職員からも提出書類の評価を行うアドミッションオフィサーを配置することが求められる。今後、アドミッションオフィサーへの入試評価業務の委嘱を進めていく。</li> </ol>			
学部独自の取り組み内容	2021年度入試より文化芸術活動・ボランティア活動を評価する入学試験を実施する。			
<指標1>	新入試・既存入試の出願資格・評価基準・審査方法、各種入試の募集人員について入試制度検討委員会にて検証・検討する。			
年度毎の目標	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度
目標	新入試の評価基準・審査方法を策定し実行する。既存入試の評価基準・審査方法を入試制度検討委員会にて検証・検討する。	各種入試の出願資格・評価基準・審査方法を入試制度検討委員会にて検証・検討する。	各種入試の出願資格・評価基準・審査方法を入試制度検討委員会にて検証・検討する。	各種入試の出願資格・評価基準・審査方法を入試制度検討委員会にて検証・検討する。
実績	新入試の評価基準・審査方法を策定し実行した。	2023年度入試より、全学的な入試制度改革が行われるため、参入の有無・出願資格・募集人員について検討した。	2023年度指定校推薦入学依頼校選定基準を見直し、2024年度以降の一般入試制度改革に伴い学部個別日程の配点パターン等を検討した。	
年度毎の目標	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
目標	各種入試の出願資格・評価基準・審査方法を入試制度検討委員会にて検証・検討する。	各種入試の出願資格・評価基準・審査方法・募集人員を入試制度検討委員会にて検証・検討する。	各種入試の出願資格・評価基準・審査方法・募集人員を入試制度検討委員会にて検証・検討する。	各種入試の出願資格・評価基準・審査方法・募集人員を入試制度検討委員会にて検証・検討する。
実績				
<指標2>				
年度毎の目標	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度
目標				
実績				
年度毎の目標	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
目標				
実績				
<p>【2022年度の進捗状況・今後の取り組み】 入試制度の全学的な変更に伴い、本学部における入試施策を検討し、参入する入試、配点パターン、判定方法等について検討した。入試種別ごとの入学者の成績調査については、引き続き実施し、検証する予定。</p>				

実施計画(タイトル)	1-(12)-③ CAP制の実質化			帳票の有無	不要
内容	履修単位上限数を下げて「キャップ制度(履修単位数の上限設定)」を実質化する。学生は授業外にさらに学修する時間が確保されるとともに、総履修者が減ることやカリキュラム上の科目数減少をあわせて検討すれば教育負担の大幅減少へという相乗効果も期待できる。 (メモ) ※履修放棄を減らし、教員・学生が授業により集中できる環境を作り、単位の実質化を目指す。 ※学部への現状調査資料が入手できたので今後、指標を検討する。 ※副次的課題:MSプログラムによるCAPの緩和				
学部独自の取り組み内容	単位の実質化に鑑み、2022年度入学生より、履修単位数の上限を変更する。				
大学基準協会による指摘事項(認証評価)	指摘事項	人間福祉学部は、複数分野専攻制(MS)を履修している者に限り、各学期 36 単位まで履修することができると定めており、1年間に履修登録できる単位数の上限が 72 単位と高く、各種の選考によって安易な制度利用を防止しているものの、単位の実質化が十分に図られているとは認められないため、単位の実質化のための改善が求められる。			
	改善計画	2021 年度第3回教授会(2021 年 6 月 9 日開催)にて、MS 履修者の各学期の履修単位数制限を30単位に変更することを決定し、人間福祉学部内規の改正も行った。履修単位数の制限の変更は、2022 年度入学生より適用する。			
<指標 3>	評価の指摘事項に対する対応				
ロードマップ	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度	
目標		対応策の検討	対応策の導入・実施	対応策の実施	
実績		MS 履修者の履修単位数上限数の削減。内規改正	『授業科目履修心得』に上限 30 単位数を明記		
【2022 年度の進捗状況・今後の取り組み】 2020 年度に受審した大学基準協会機関別認証評価において、上記の指摘を受けたため、2021 年度第3回教授会(2021 年 6 月 9 日開催)にて、MS 履修者の各学期の履修単位数制限を30単位に変更することを決定し、人間福祉学部内規の改正も行った。履修単位数の制限の変更は、2022 年度入学生より適用した。2022 年度以降の『授業科目履修心得』の「履修登録上の注意事項」の該当部分も修正し、学生に周知をした。					

実施計画(タイトル)	1-(12)-⑧ シラバスの実質化			帳票の有無	不要
内容	組織的な教育力を向上するため、三つのポリシーに基づく教学マネジメントを推進することが中心的な課題であり、そのための重点戦略としてシラバスの精緻化から取り組む。特に「授業目的」と「到達目標」を明確にすることで、カリキュラム全体の中での科目の位置づけや他の科目との比較が可能になり、科目間の相互関係を整理する契機となる。それによって CP や DP の適切性・妥当性といった上流に遡ることが可能となる。また、シラバスの精緻化は、授業外学修時間の増加につながる。				
学部独自の取り組み内容	学部・大学院合同FD委員会を開催し、人間福祉学部が責任開講学部となる全科目の、特に「授業目的」「到達目標」「成績評価」の重点項目について第三者(FD委員)によるシラバスチェックを実施し、シラバスの記載内容の修正を依頼している。				
<指標 1>	学部・大学院合同FD委員会を開催し、第三者によるシラバスチェックを実施し、シラバスの内容について改善を行う。				
年度毎の目標	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度	
目標	学部・大学院合同FD委員会を開催し、シラバスチェックの内容・実施体制を検証し、検討する。第三者によるシラバスチェックを実施し、シラバス内容の修正を依頼する。	学部・大学院合同FD委員会を開催し、シラバスチェックの内容・実施体制を検証し、検討する。第三者によるシラバスチェックを実施し、シラバス内容の修正を依頼する。	学部・大学院合同FD委員会を開催し、シラバスチェックの内容・実施体制を検証し、検討する。第三者によるシラバスチェックを実施し、シラバス内容の修正を依頼する。	学部・大学院合同FD委員会を開催し、シラバスチェックの内容・実施体制を検証し、検討する。第三者によるシラバスチェックを実施し、シラバス内容の修正を依頼する。	
実績	2021 年 1 月に学部・大学院合同FD委員会を開催し、シラバスチェックの内容・実施体制を検証し、検討する。第三者によるシラバスチェックを実施する予定。	2022 年 1 月に学部・大学院合同FD委員会を開催し、シラバスチェックの内容・実施体制を検証し、検討する。第三者によるシラバスチェックを実施する予定。	2023 年 1 月に学部・大学院合同FD委員会を開催し、シラバスチェックの内容・実施体制を検証し、検討する。第三者によるシラバスチェックを実施する予定。		
年度毎の目標	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度	
目標	学部・大学院合同FD委員会を開催し、シラバスチェックの内容・実施体制を検証し、検討する。第三者によるシラバスチェックを実施し、シラバス内容の修正を依頼する。	学部・大学院合同FD委員会を開催し、シラバスチェックの内容・実施体制を検証し、検討する。第三者によるシラバスチェックを実施し、シラバス内容の修正を依頼する。	学部・大学院合同FD委員会を開催し、シラバスチェックの内容・実施体制を検証し、検討する。第三者によるシラバスチェックを実施し、シラバス内容の修正を依頼する。	学部・大学院合同FD委員会を開催し、シラバスチェックの内容・実施体制を検証し、検討する。第三者によるシラバスチェックを実施し、シラバス内容の修正を依頼する。	
実績					
【2022 年度の進捗状況・今後の取り組み】 昨年度に引き続き、2021 年度も学部・大学院合同FD委員会を開催し、人間福祉学部が責任開講学部となる全科目の、特に「授業目的」「到達目標」「成績評価」の重点項目について、第三者(FD委員)によるシラバスチェックを実施し、シラバスの記載内容が適切に記載されているかの確認を行い、必要に応じて授業担当者に修正を依頼する予定。					

実施計画(タイトル)	1-(13)-② 教職協働によるアカデミックアドバイスの仕組み確立			帳票の有無	不要
内容	<p>教職協働によるアカデミックアドバイスの仕組みを確立し、学生の学びをサポートし、残留生、退学者をださないキャンパスを目指す。アカデミックアドバイス制度は実施から4年がたち、現在行われている対象学生の見直しなどの検討も必要となっている。</p> <p>— 以下、SGU時の文章 —</p> <p>本学では、従来から成績不振者へのサポートを目的とした様々な指導を学部ごとに実施してきたが、GPAのさらなる活用と学生に対してより適切かつ高度な学修支援を行うという観点から、2015年度より「アカデミックアドバイザー制度」を全学的な仕組みとして導入する。</p> <p>アカデミックアドバイザーは、学部ごとに人数を定め、学部所属の専任教員から選出するものとする。各学部は修得単位数、GPA、出席状況のいずれか、もしくは複数を用いて指導対象となる学生の基準を定める。指導対象学生に対しては、アカデミックアドバイザーが個別面談および学修指導等の修学上の支援を行う。</p> <p>制度導入後は、教育力向上(ファカルティ・ディベロップメント)部会において本制度の運用状況に関する情報共有を行い、より一層の改善等に取り組む予定である。</p>				
学部独自の取り組み内容	1年次春学期の修得単位数が15単位以下の者、1年次通年の修得単位数が30単位以下の者に対して、アカデミックアドバイザーと事務職員がペアとなって個別面談を実施し、学修指導等の修学上の支援を行っている。面談後は記録を作成し、面談の実施状況について学部長室委員会にて共有するとともに、対象学生の保証人に、学生本人の学修状況および面談実施の経緯等を文書で通知し、学生への指導・支援を促している。				
<指標 1>	面談後の対象学生の単位の修得状況・成績を検証し、基準・実施方法を見直す。				
年度毎の目標	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	
目標	面談後の対象学生の単位の修得状況・成績を検証し、対象とする学生の基準・実施方法の見直しを検討する。	基準や実施方法について見直し、教授会で承認を得て、新たな運用方法で面談を実施する。面談後の対象学生の単位の修得状況・成績を定期的に検証する。	面談を実施する。面談後の対象学生の単位の修得状況・成績を定期的に検証する。	面談を実施する。面談後の対象学生の単位の修得状況・成績を定期的に検証する。	
実績	2020年度春学期の成績修得状況を勘案して、対象学年を拡大してアカデミックアドバイザー制度を実施した。	2021年度春学期の成績修得状況を勘案して、対象学年の該当学生にアカデミックアドバイザー制度を実施した。	2022年度春学期の成績修得状況を勘案して、対象学年の該当学生にアカデミックアドバイザー制度を実施した。		
年度毎の目標	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度	
目標	面談を実施する。面談後の対象学生の単位の修得状況・成績を定期的に検証する。	面談を実施する。面談後の対象学生の単位の修得状況・成績を定期的に検証する。	面談を実施する。面談後の対象学生の単位の修得状況・成績を定期的に検証する。	面談を実施する。面談後の対象学生の単位の修得状況・成績を定期的に検証する。	
実績					
<指標 2>					
年度毎の目標	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	
目標					
実績					
年度毎の目標	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度	
目標					
実績					
<p><b>【2022年度の進捗状況・今後の取り組み】</b></p> <p>例年通り、各学期履修登録前にアカデミックアドバイザーと事務職員がペアとなって個別面談を実施し、学修指導等の修学上の支援を行い、学部長室委員会にて情報共有を行った。アカデミックアドバイザーの実施方法についても、面談のフローを一部変更する等の改善を行った。今後も引き続き、対象学生の基準や実施方法の見直しを検討する。</p>					

実施計画(タイトル)	1-(13)-③ TA・LA・SAの活用推進			帳票の有無	要
内容	<p>LAの配置により、授業での教育支援(教員への支援を含む)、授業外での学修支援を強化する。初年次教育である導入科目等を対象としたLAIについては制度開始から7年がたち、今後の在り方は新たなライティングサポート制度と合わせて考えていく。</p> <p>SAについては、特に全学科目情報科学科目の現状の課題を抽出し、現状のままか、外部委託するかを検討する。</p> <p>TAについて各学部では、①大学院生の減少で確保が難しい、②大学院生全員にあたらぬ、③月額報酬の場合、報酬に対して実働が少ない、人によって実働に差が生じる、④確保したいが他研究科生を重複採用できない、などの課題があり、①業務実働に合わせた報酬制度、②他研究科生の重複採用、③外部委託、などを検討することが考えられる。</p>				
学部独自の取り組み内容	LAIについては、実技科目に技能実演等の授業支援のために優先的に配置し、残りの予算で語学や実践教育科目の学修支援のために配置している。TAについては、授業の補佐・学部における教育的補助業務で採用している。				
<指標1>	LAの効果・活用方法について定期的に検証する。				
年度毎の目標	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	
目標	LAの効果・活用方法について定期的に検証する。	LAの効果・活用方法について定期的に検証する。	LAの効果・活用方法について定期的に検証する。	LAの効果・活用方法について定期的に検証する。	
実績	学部長室委員会・教授会等の会議体で、LA・TAの効果・活用方法について検証する予定。	学部長室委員会・教授会等の会議体で、LA・TAの効果・活用方法について検証する予定。	学部長室委員会・教授会等の会議体で、LA・TAの効果・活用方法について検証する予定。		
年度毎の目標	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度	
目標	LAの効果・活用方法について定期的に検証する。	LAの効果・活用方法について定期的に検証する。	LAの効果・活用方法について定期的に検証する。	LAの効果・活用方法について定期的に検証する。	
実績					
<指標2>	TAの効果・活用方法について定期的に検証する。				
年度毎の目標	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	
目標	TAの効果・活用方法について定期的に検証する。	TAの効果・活用方法について定期的に検証する。	TAの効果・活用方法について定期的に検証する。	TAの効果・活用方法について定期的に検証する。	
実績					
年度毎の目標	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度	
目標	TAの効果・活用方法について定期的に検証する。	TAの効果・活用方法について定期的に検証する。	TAの効果・活用方法について定期的に検証する。	TAの効果・活用方法について定期的に検証する。	
実績					
<p>【2022年度の進捗状況・今後の取り組み】</p> <p>2022年度は例年通り、学部運用ルールに基づき、LA・TAを配置している。</p> <p>学部長室委員会・教授会等の会議体で、LA・TAの効果・活用方法について検証する予定。</p>					

実施計画(タイトル)	8-(2)-① KGI・KPIの設定・活用			帳票の有無	不要
内容	非営利組織である学校のマネジメントにおける最大の課題の一つは、最上位のアウトカム(成果)を定め、その達成度を測るKGIやKPIを設定することにある。学院ではKPIダッシュボード等のツールを活用して「Kwansei Grand Challenge 2039」(超長期ビジョン・長期戦略)および中期総合経営計画(実施計画・基盤計画)の進捗や達成度を含めた成果を検証する仕組みを構築する。そのために、教学・経営両面のデータ活用を司るのに最適な組織体制を確立する。また、各学校および大学の各学部も、全学のKPIと連動しながら個別の状況に合わせて独自にKPIを設定し、毎年その数値や取組状況を評価し、改善・促進の取り組みに活用する。				
学部独自の取り組み内容					
<指標 1>					
年度毎の目標	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度	
目標					
実績					
年度毎の目標	※本帳票の末尾において、学修成果を測定する学部独自のKGI・KPIを策定しており、これらの指標を用いて毎年度学部における実施計画・全体の取組みの評価を行っている。				
目標					
実績					
<指標 2>					
年度毎の目標	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度	
目標					
実績					
年度毎の目標	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度	
目標					
実績					
【2022 年度の進捗状況・今後の取り組み】					

実施計画(タイトル)	8-(10)-① 内部質保証体制の確立と運用			帳票の有無	要
内容	<p>本学には、従来から二つの大きなPDCAサイクルが存在していた。一つは中期計画(含む)であり、もう一つは大学の自己点検・評価および各学校の学校評価である。両者はそれぞれの目的体系を持ちながら重複する部分が多く、業務負担の軽減の観点からも、共通の目的・目標の下で学院・大学全体を見渡した統合的なPDCAサイクルの確立が必須となっている。</p> <p>このため、本学では、2019 年度から各学部／研究科、短期大学・各学校が本格的に取組を開始する「中期総合経営計画」において、その取組の成果を定期的に測定、評価、改善することを通じて、効率的・効果的なマネジメントの実現を図る。</p>				
学部独自の取り組み内容					
<指標 1>					
年度毎の目標	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度	
目標					
実績					
年度毎の目標	※2020 年度入学生より、「Kwansei コンピテンシー」を獲得することを念頭に置く旨を、各学部のディプロマ・ポリシー(DP)に追記済。				
目標					
実績					
<指標 2>					
年度毎の目標	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度	
目標					
実績					
年度毎の目標	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度	
目標					
実績					
【2022 年度の進捗状況・今後の取り組み】					

## (2)選択型

実施計画(タイトル)	1-(11)-② 学部におけるハンズオン・ラーニングプログラムの推進			帳票の有無	要
内容	SGU ダブルチャレンジ制度では、アウェイチャレンジ(①国際プログラム、②ハンズオン・ラーニングプログラム、③副専攻プログラム)の単位を修得して卒業する学生数(実数)を指標としており、SGU最終年度の2023年度においては5700名を目標数値としている。その5700名のうち約3000名が②ハンズオン・ラーニングプログラムの単位を修得することがもう一つの目標値である。目標である3000人を達成するためには、ハンズオン・ラーニングセンター開講科目の単位修得者数を増加させることはもちろんではあるが、学部におけるハンズオン・ラーニングを推進し、学部開講ハンズオン・ラーニングプログラム単位修得者数の増加を図らなければならない。				
学部独自の取り組み内容	SGU 施策推進のため、学部独自のプログラムとして、2017年度より「人間福祉グローバル演習」の科目を新設し、毎年度開講している。				
<指標1>	広報の推進				
年度毎の目標	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	
目標	プログラム内容、参加者の感想などをHP、学部広報誌等で広報する。	プログラム内容、参加者の感想などをHP、学部広報誌等で広報する。	プログラム内容、参加者の感想などをHP、学部広報誌等で広報する。	プログラム内容、参加者の感想などをHP、学部広報誌等で広報する。	
実績	HP、学部広報誌でハンズオン・ラーニングプログラムの広報を行った。	HP、学部広報誌でハンズオン・ラーニングプログラムの広報を行った。	HP、学部広報誌でハンズオン・ラーニングプログラムの広報を行った。		
年度毎の目標	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度	
目標	プログラム内容、参加者の感想などをHP、学部広報誌等で広報する。	プログラム内容、参加者の感想などをHP、学部広報誌等で広報する。	プログラム内容、参加者の感想などをHP、学部広報誌等で広報する。	プログラム内容、参加者の感想などをHP、学部広報誌等で広報する。	
実績					
<指標2>					
年度毎の目標	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	
目標					
実績					
年度毎の目標	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度	
目標					
実績					
<p><b>【2022年度の進捗状況・今後の取り組み】</b>  今年度は「人間福祉グローバル演習E」「人間福祉海外フィールドスタディ」を開講。2023年度2月にコロンビア(人間福祉グローバル演習E)、ルワンダ(社会起業フィールドワーク海外)へそれぞれ渡航予定。また、国際プログラムの「Human Welfare and International Development」については、海外の協定機関とのオンライン融合プログラムとして開講した。カナダへの「社会起業英語中期留学」についても2022年度5月より派遣、履修者の体験談をホームページで広報を行うなどした。</p>					

### 3. 人間福祉学部のKPI

#### (1) 学修成果に関するKPI

KPI	定義	基準	現在値 <sup>(2018年度)</sup>	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
DPIに定める資質・能力の獲得状況	あなたはこの授業を通して卒業までに求められる資質・能力を向上できたと思いますか。(「そう思う」～「そう思わない」の5段階評価) 「学修行動と授業に関する調査」	5段階評価のうち、上位2つ (A「そう思う」、B「どちらかといえばそう思う」)の回答割合(%)	非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
Kwansei コンピテンシー獲得状況	知識・能力・資質の程度 全項目 (「大変身についた」～「全く身につけていない」の5段階評価) (2018～2022年度) 当該年度卒業生と次年度1年生との調査による伸び (2023～2027年度) 当該年度卒業生とその1年生時との調査による伸び 「IR 新入生調査」「IR 卒業生調査」	5段階評価のうち、上位2つ (「大変身についた」「やや身についた」)の回答割合(%)の平均の差	現在値 <sup>(2018年度)</sup>	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
汎用的能力の獲得状況	入学後の能力変化(表外※参照) (「大きく増えた」～「大きく減った」の5段階評価) 「IR 上級生調査」	5段階評価のうち、上位2つ (A「大きく増えた」、B「増えた」)の回答割合(%)	現在値 <sup>(2018年度)</sup>	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
授業外学修時間	授業外時間に、授業課題や準備時間、復習をする時間(一週当たりの平均) 「IR1年生調査、IR 上級生調査」	一週あたり6時間以上の割合	現在値 <sup>(2018年度)</sup>	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
授業目的・到達目標の達成度	あなたは、シラバスに示された授業の目的や、到達目標を達成できると思いますか。(「そう思う」～「そう思わない」の5段階評価) 「学修行動と授業に関する調査」	5段階評価のうち、A「そう思う」、B「どちらかというそう思う」の回答割合(%)	現在値 <sup>(2018年度)</sup>	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
授業満足度	あなたは、全体としてこの授業に満足していますか。(「そう思う」～「そう思わない」の5段階評価) 「学修行動と授業に関する調査」	5段階評価のうち、A「そう思う」、B「どちらかというそう思う」の回答割合(%)	現在値 <sup>(2018年度)</sup>	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
留学等派遣数	協定校への派遣学生数 「国際連携機構資料」	大学間協定に基づく派遣日本人学生数	現在値 <sup>(2018年度)</sup>	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
TOEIC/TOEFL等の英語運用能力	SGUの取組みで確認している TOEFL 換算得点目標の達成人数 <参考(学部別目標値)> ■国際: TOEFL 換算 550点 ■文・総政: TOEFL 換算 540点 ■その他: TOEFL 換算 520点 「SGUに関する調査」	左記「TOEFL 換算得点」目標の達成人数(人)	現在値 <sup>(2018年度)</sup>	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
学生生活満足度	大学生活を振り返って、学生生活は満足したものでしたか。(「満足」～「不満」の5段階評価) 「IR 卒業1年目調査」	5段階評価のうち、上位2つ (A「満足」、B「そこそこ満足」)の回答割合(%)  * 2018年度調査までは、A「とても満足」、B「満足」と回答した比率	現在値 <sup>(2018年度)</sup>	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
就職率	就職率 「キャリアセンター統計資料」	就職者数(自営含まず)/就職希望者数	現在値 <sup>(2018年度)</sup>	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
大学院進学率	大学院進学率 「キャリアセンター統計資料」	大学院進学者数/学部卒業生数	現在値 <sup>(2018年度)</sup>	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開

(※)「知識・技能・能力の獲得状況」の「知識・技能・能力」とは、一般的な教養、論理的思考力、専門分野や学科の知識、グローバルな問題の理解、多様性を尊重する力、主体的に行動する力、リーダーシップ力、人間関係を構築する力、対立する価値を調整する力、地域社会が直面する問題を理解する能力、国民が直面する問題を理解する能力、困難を乗り越える粘り強さ、文章表現の能力、外国語の運用能力、生涯にわたって学び続ける能力、コミュニケーション能力、プレゼンテーション能力、数理的な能力、コンピュータの操作能力、誠実さと品位、時間を効果的に利用する能力、卒業後に就職するための準備の程度、を指す。



## (2) 学部独自KPI

KPI	定義	基準	現在値 (2018年度)	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
ハンズオン・ラーニングの推進	人間福祉学部開講のハンズオン・ラーニング科目(大学でハンズオン・ラーニング科目と定められた科目)を卒業時に2科目以上単位取得して卒業した学生の割合		非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
社会福祉士・精神保健福祉士の合格率の向上	社会福祉士、精神保健福祉士の国家試験受験者の合格者の割合	A 社会福祉士の合格率 B 精神保健福祉士の合格率	現在値 (2018年度)	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開

## (3) 学院全体のKPIに関する指標

KPI	定義	基準	現在値 (2018年度)	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
入試難易度(偏差値)	ベネッセの進研模試のデータにおける合格可能性 60%以上となる偏差値(次年度偏差値予想を記載) 高大接続センター		非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
同系列学部勝敗	ベネッセの進研模試のデータにおける同系列学部合格者の競合大学(同志社、立命館、関西)との入学比率(当該年度結果を記載) 総合企画部	本学と相手校の両方に合格していずれかに入学した受験生のうち、本学に入学した者の比率 本学入学者数/(本学入学者数+併願校入学者)(%)	現在値 (2018年度)	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
外国人留学者数	外国人留学生 CIEC 年次報告書	詳細は SGU の定義に準拠	現在値 (2018年度)	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
ダブルチャレンジ派遣者数	当該年度の卒業生のうち、ダブルチャレンジ制度のアウェイチャレンジの単位を取得して卒業した学生数 グローバル化推進本部	①インターナショナルプログラム②ハンズオン・ラーニング・プログラム③副専攻プログラムのいずれかで単位取得し卒業した学生数 ※学部毎は延べ人数	現在値 (2018年度)	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
卒業後の進路の満足度	卒業後の進路の満足度(「満足」～「不満」の5段階評価) 卒業時調査	5段階評価のうち「満足」と回答した比率(%)	現在値 (2018年度)	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
スクールモットーの浸透度	スクールモットー“Mastery for Service”を普段意識する程度は(「常に行動の規範としている」～「全く意識しない」の5段階評価) IR 卒業生調査	5段階評価のうち、A「常に行動の規範としている」または B「ときどき意識している」と回答した割合(%)  * 2018 年度調査までは A「常に行動の規範としている」または B「頻繁に意識している」と回答した比率	現在値 (2018年度)	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
Well-being 度	現在の自分を取り巻く環境(特定 7 項目)に対して、あなたはどのように思いますか。(「そう思う」～「そう思わない」の 4 段階評価) IR 卒業生調査	「E 時折、収入面が不安になることがある」を除く7項目に対して A「そう思う」、B「どちらかといえばそう思う」と回答した割合の平均値	現在値 (2018年度)	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開

## 人間福祉学部実施計画・全体評価


学修成果に関するKPIに関しては、KPIを設定して間もないこともあって大きな変化は確認できていないが、1年生の「授業外学修時間」や「TOEIC/TOEFL等の英語運用能力」において向上していることが確認できる。しかし、2022年度の『学生調査結果』の「問12-2【今学期の生活時間(週平均)】予習・復習・課題等の勉強をする」の結果からは、1年生も3年生ともに他学部と比較すると短い時間となっており、本学部の各授業における授業外学習時間を増やす取り組みが必要だと考えられる。今後は2020年度入学生から適用している学部の新カリキュラムにおける3学科共通のハンズオン・ラーニング科目(人間福祉フィールドスタディⅠ～Ⅲ)や3学科共通の基礎演習の全クラス共通のカリキュラムなどの導入によって、学習成果に関するKPIや学部独自のKPIである「ハンズオン・ラーニングの推進」を目指す。また、同じく学部独自のKPIである「社会福祉士・精神保健福祉士の合格率の向上」に関しては、2021年度から全国的に適用される新しいカリキュラムに基づき、本学部の強みである実践教育をさらに充実させることによって達成を目指す。新型コロナウイルスの影響が心配され、留学等派遣数や外国人留学者数など海外に関連するKPIに関しては計画通りに進められない可能性もあるが、COILである学部独自の融合科目を提供するなどの新しい取り組みを導入することによって、できる限りの達成を目指す。

# 【人間福祉研究科】中期計画総括シート

提出日:2022年12月20日

責任者	人間福祉研究科 委員長	担当部局	人間福祉研究科
-----	----------------	------	---------

## 1 人間福祉研究科の理念、目的、各種方針

人間福祉研究科の理念	変更の有無
関西学院の建学の精神であるキリスト教主義教育とスクールモットーである「Mastery for Service(奉仕のための練達)」を基本にして、急速なグローバル化と少子高齢社会等の下で変化する価値観の中で、多様化する社会的、心理的、あるいは政治的、経済的問題に対する精緻な分析能力を保持し、社会福祉学を基本にした学際的なアプローチで、問題解決に向けた高い実践能力や実証研究能力を涵養する。これにより、従来の社会福祉学分野にとどまらず、隣接した領域においても指導的役割を担える人材養成や研究者の育成を果たす。	有・ 
人間福祉研究科の目的	変更の有無
前期課程では、人間福祉の諸分野を学び、高い学識と高度な専門的な知識を持ち、リサーチ能力、分析能力、政策立案能力を涵養し、社会の様々な場においてその専門性を発揮し、社会に貢献できる人材の育成を目的とする。同時に、後期課程に進学していくための研究指導と教育も行う。 後期課程では、人間福祉の領域における高度な研究能力を涵養し、学問研究の継承と独創的な研究により博士学位を取得できる人材の育成を目的とする。	有・ 
学位授与方針(DP)	変更の有無
Kwansei コンピテンシーの獲得を念頭において、人間福祉研究科のDPを以下のとおり定める。  [前期課程] 修士(人間福祉)の学位は、以下の修了要件を満たす者に与えられます。  1. 人間福祉研究科博士課程前期課程に所定の年限在学し、所定の単位を修得し、修士論文の審査に合格した者。 2. 人間福祉研究の基礎となる思想・理論・歴史、及びその応用と発展につながる社会科学と人間科学の関連領域を学び、福祉の現場、行政、教育分野等において広く福祉社会の維持・発展に貢献できる高度な専門知識、及び実践的な技法を有すると認められる者。  [後期課程] 博士(人間福祉)の学位は、以下の修了要件を満たす者に与えられます。  1. 人間福祉研究科博士課程に所定の年限在学し、所定の単位を修得し、博士論文の審査に合格した者。 2. 人間福祉の専門領域において、自立した研究者として高い水準のリサーチから得た独自データを活用できる高度な研究能力、及び専門領域に新たな理論的枠組みを提供する独創的な知見を有すると認められる者。	有・ 
教育課程の編成・実施方針(CP)	変更の有無
[前期課程] 前期課程では、研究者育成を目的としたカリキュラムだけでなく、福祉社会の維持・発展に貢献できる人材育成を前提とした多様なカリキュラムを整備しています。「人と社会(環境)の相互作用」の科目では社会福祉の様々な分野について、「社会系」の科目では福祉社会を支える国家や社会の構造について学びます。そして「人間系」科目では、人のこころと身体にかかわる問題を学びます。これらの科目以外にも、英語文献の講読科目やフィールドワーク科目を開講しており、狭い専門領域にとらわれることなく幅広く学べるように科目を配置しています。これらの科目を修得することで高度な知識と専門的技法を身に付け、その成果を修士論文としてまとめることができるように論文指導を行います。  [後期課程] 後期課程では、在籍者が研究テーマに即して指導教授を選び、その指導の下で博士論文の作成に取り組めるようにカリキュラムを整備しています。国内外の文献研究や質的・量的なリサーチの実施といったことで研究を深めるだけでなく、学会での報告や研究論文の学術雑誌への投稿・掲載で成果を社会に問うことも求めます。そして、これらの成果をまとめて博士論文を完成できるように論文指導を行います。また博士学位キャンディデート制を設けており、1年以内に博士論文を提出できると研究科から認められた者をキャンディデートとして承認します。	有・ 

学生の受け入れ方針(AP)	変更の有無
<p><b>博士課程前期課程</b> 前期課程においては、人間福祉の諸分野に高い関心を持ち、社会のさまざまな場においてその専門性を発揮し、社会に貢献する意欲のある者を受け入れています。また、広く社会から人材を集めつつ、国際的な研究活動に取り組むために、社会人および留学生の受け入れを積極的に図っています。</p> <p><b>博士課程後期課程</b> 後期課程においては、人間福祉領域における高度な研究能力を身につけ、優れた研究を行うことのできる者を受け入れています。</p>	有・ 
学生支援に関する方針	変更の有無
作成しない。	有・無
教員像	変更の有無
<ol style="list-style-type: none"> <li>前期課程においては、「人」と「社会(環境)」とその相互作用に関わる多様な問題に対して、社会福祉学を基本とした人間福祉に関わる諸領域における学際的な視点に基づく問題解決のための高度な専門的知識や技法を教授すると共に、高いリサーチ能力を通して独創的な知見を生み出し社会に貢献するために必要となる能力の育成に真摯に取り組む姿勢を持つ。後期課程においては、加えて教育・研究者としての指導能力の育成にも取り組む姿勢を持つ。</li> <li>専門分野においては、自らの研究課題に向き合い、誠実に継続的に探究し、その成果を発信して社会に貢献できるような高い研究能力を持つ。</li> <li>組織の発展、継続のために、自らの持つ力を活用し、また他の多くの教職員と共に協働・連携して課題に取り組む姿勢を持つ。</li> </ol>	有・ 
教員組織の編制方針	変更の有無
学際的な人間福祉研究科の特性に合わせて、学生のニーズに対応できる教育課程を保証できるよう、専門分野・教育研究業績・外国での学位取得状況に鑑み、人数・年齢構成・男女比・職位等を勘案の上、適切に教員を配置するための手続きを明確化、透明化する。	有・ 

2. 実施計画

(1) 必須型

実施計画(タイトル)	1-(1)-② 三つのポリシーに基づく教学マネジメントの推進(3ポリシーの見直し・検証、カリキュラム見直し・拡充、カリキュラムマップの整備)			帳票の有無	不要
内容	<p>本学は、大学として「学部/研究科の区別なく学生が共通に身に付けるべき知識・能力・資質」(「Kwansei コンピテンシー」)を時代に即して新たに定め、各学部・研究科はそれを土台に「各分野における学位授与に必要な知識・技能」であるDP(ディプロマポリシー)を策定する。このDPは、すべての学生が卒業/修了必要単位数を取得した段階で修得しているべき学修成果を表したものである。この基本原理を守るべく、学部・研究科は(a)DPの再確認(b)DPとCP(カリキュラムポリシー)の整合(c)シラバスの実質化(d)シラバスに沿った成績評価(e)DPとAP(アドミッションポリシー)の連動、を厳格に運用する。</p> <p>本学はこうした学部/研究科による三つのポリシーに基づく教学マネジメントを統括し、大学全体の内部質保証を推進することで、卒業する全ての学生の質を保証する。</p>				
学部独自の取り組み内容	大学院諸問題検討委員会・研究科委員会・後期課程指導教員委員会等の会議体において、3つのポリシーに基づく教学マネジメントについて、検証・検討する機会を設けている。				
<指標1>	3つのポリシーに基づく教学マネジメントの検証と検討				
年度毎の目標	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	
目標	大学院諸問題検討委員会・研究科委員会・後期課程指導教員委員会等の会議体において検証し検討する。	大学院諸問題検討委員会・研究科委員会・後期課程指導教員委員会等の会議体において検証し検討する。	大学院諸問題検討委員会・研究科委員会・後期課程指導教員委員会等の会議体において検証し検討する。	大学院諸問題検討委員会・研究科委員会・後期課程指導教員委員会等の会議体において検証し検討する。	
実績	3つのポリシーの厳格な運用の一環として、博士論文の審査体制を将来的に変更することについて、大学院諸問題検討委員会、学部長室委員会、後期課程指導教員委員会にて承認を得た。	2021年度第8回研究科委員会(2021年12月8日開催)において、3つのポリシーに基づく教学マネジメントについて、検証し、意見交換を行った。	2022年度第8回研究科委員会(2022年12月7日開催)において、3つのポリシーに基づく教学マネジメントについて、検証し、意見交換を行った。		
年度毎の目標	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度	
目標	大学院諸問題検討委員会・研究科委員会・後期課程指導教員委員会等の会議体において検証し検討する。	大学院諸問題検討委員会・研究科委員会・後期課程指導教員委員会等の会議体において検証し検討する。	大学院諸問題検討委員会・研究科委員会・後期課程指導教員委員会等の会議体において検証し検討する。	大学院諸問題検討委員会・研究科委員会・後期課程指導教員委員会等の会議体において検証し検討する。	
実績					
<指標2>					
年度毎の目標	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	
目標					
実績					
年度毎の目標	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度	
目標					
実績					
大学基準協会による指摘事項(認証評価)	指摘事項	教育課程の編成・実施方針に、人間福祉研究科博士課程後期課程では教育課程の編成に関する基本的な考え方を示していない。			
	改善計画	2021年度第7回研究科委員会(2021年11月17日開催)にて、科目群、分野の科目構成、体系性といった「教育課程の編成・実施方針」についての考え方を読み取れる内容に2022年度より改定することを決定した。			
	指摘事項	研究指導計画について、人間福祉研究科博士課程前期課程、同後期課程では、研究指導の方法を定めていないため、これを定めあらかじめ学生に明示するよう、是正されたい。			
	改善計画	2021年度第7回研究科委員会(2021年11月17日開催)にて、「研究科及び指導教員からどういった研究指導を行うか」を明確化するため、学位取得プロセスに、課程修了に必要な授業科目の履修と単位数、学位論文作成に対する指導の両面を記載した文言を追記することを決定した。			
<指標4>	<認証評価対応>教育課程の編成・実施方針の見直し				
ロードマップ	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	
目標		対応策の検討	対応策の導入・実施	対応策の実施	
実績		科目群、分野の科目構成、体系性といった「教育課程の編成・実施方針」についての考え方を読み取れる内容に2022年度より改定することを決定した。	科目群、分野の科目構成、体系性といった「教育課程の編成・実施方針」についての考え方を読み取れる内容に2022年度より改定し、『学生の手引き』を通じて、周知した。		
<指標5>	<認証評価対応>研究指導計画の改善				
ロードマップ	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	
目標		対応策の検討	対応策の導入・実施	対応策の実施	
実績		学位取得プロセスに、課程修了に必要な授業科目の履修と単位数、学位論文作成に対する指導の両面を記載した文言を追記することを決定した。	学位取得プロセスに、課程修了に必要な授業科目の履修と単位数、学位論文作成に対する指導の両面を記載した文言を、『学生の手引き』を通じて、周知した。		
<p>【2022年度の進捗状況・今後の取り組み】</p> <p>2024年度改正に向けたカリキュラム変更を視野にいれつつ、学位取得プロセスの抜本的な見直しを大学院諸問題検討委員会、学部長室委員会、研究科委員会、及び後期課程指導教員委員会にて検討することを確認した。2023年度以降も引き続き、3つのポリシーに基づく教学マネジメントを念頭において、学位取得プロセスの検証・検討する機会を設ける。</p>					



実施計画(タイトル)	8-(2)-① KGI・KPIの設定・活用			帳票の有無	不要
内容	非営利組織である学校のマネジメントにおける最大の課題の一つは、最上位のアウトカム(成果)を定め、その達成度を測るKGIやKPIを設定することにある。学院ではKPIダッシュボード等のツールを活用して「Kwansei Grand Challenge 2039」(超長期ビジョン・長期戦略)および中期総合経営計画(実施計画・基盤計画)の進捗や達成度を含めた成果を検証する仕組みを構築する。そのために、教学・経営両面のデータ活用を司るのに最適な組織体制を確立する。また、各学校および大学の各学部も、全学のKPIと連動しながら個別の状況に合わせて独自にKPIを設定し、毎年その数値や取組状況を評価し、改善・促進の取組みに活用する。				
学部独自の取組み内容					
<指標1>					
年度毎の目標	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	
目標					
実績					
年度毎の目標	※本帳票の末尾において、学修成果を測定する研究科独自のKGI・KPIを策定しており、これらの指標を用いて毎年度研究科における実施計画・全体の取組みの評価を行っている。				
目標					
実績					
<指標2>					
年度毎の目標	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	
目標					
実績					
年度毎の目標	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度	
目標					
実績					
【2022年度の進捗状況・今後の取組み】					

実施計画(タイトル)	8-(10)-① 内部質保証体制の確立と運用			帳票の有無	要
内容	<p>本学には、従来から二つの大きなPDCAサイクルが存在していた。一つは中期計画(SGU 含む)であり、もう一つは大学の自己点検・評価および各学校の学校評価である。</p> <p>両者はそれぞれの目的体系を持ちながら重複する部分が多く、業務負担の軽減の観点からも、共通の目的・目標の下で学院・大学全体を見渡した統合的なPDCAサイクルの確立が必須となっている。</p> <p>このため、本学では、2019 年度から各学部／研究科、各学校が本格的に取組を開始する「中期総合経営計画」において、その取組の成果を定期的に測定、評価、改善することを通じて、効率的・効果的なマネジメントの実現を図る。</p>				
学部独自の取り組み内容					
<指標 1>					
年度毎の目標	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度	
目標					
実績					
年度毎の目標	※研究科における毎年度の本帳票の作成および学内各種会議体での点検・評価、改善活動などにより、内部質保証システムの PDCA サイクルを確立する。				
目標					
実績					
<指標 2>					
年度毎の目標	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度	
目標					
実績					
年度毎の目標	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度	
目標					
実績					
【2022 年度の進捗状況・今後の取り組み】					

### 3. 人間福祉研究科のKPI

#### (1) 学修成果に関するKPI

KPI	定義	基準	現在値(2018年度)		2019年度		2020年度		2021年度		2022年度	
			M	D	M	D	M	D	M	D	M	D
学位授与数(M・D・P)	修士、博士、修士(専門職)の学位授与数(※乙号除く) 「大学基礎データ」	授与する学位数が多いほど○(人)	M	非公開	M	非公開	M	非公開	M	非公開	M	非公開
			D	非公開	D	非公開	D	非公開	D	非公開	D	非公開
			2023年度		2024年度		2025年度		2026年度		2027年度	
			M	非公開	M	非公開	M	非公開	M	非公開	M	非公開
就職・進路決定率(M)	就職・進路決定率 「キャリアセンター統計資料」	(就職+自営+就労継続)/(修了者一進学者)	現在値(2018年度)		2019年度		2020年度		2021年度		2022年度	
			非公開		非公開		非公開		非公開		非公開	
			2023年度		2024年度		2025年度		2026年度		2027年度	
			非公開		非公開		非公開		非公開		非公開	
博士後期課程への進学者数(M)	進学者数 「キャリアセンター統計資料」		現在値(2018年度)		2019年度		2020年度		2021年度		2022年度	
			非公開		非公開		非公開		非公開		非公開	
			2023年度		2024年度		2025年度		2026年度		2027年度	
			非公開		非公開		非公開		非公開		非公開	
日本学術振興会特別研究員数(新規)(D)	特別研究員のうち、当該年度の新規採用者 「研究推進社会連携機構資料」		現在値(2018年度)		2019年度		2020年度		2021年度		2022年度	
			非公開		非公開		非公開		非公開		非公開	
			2023年度		2024年度		2025年度		2026年度		2027年度	
			非公開		非公開		非公開		非公開		非公開	
研究者輩出数(D)(将来)			現在値(2018年度)		2019年度		2020年度		2021年度		2022年度	
			非公開		非公開		非公開		非公開		非公開	
			2023年度		2024年度		2025年度		2026年度		2027年度	
			非公開		非公開		非公開		非公開		非公開	

#### (2) 研究科独自KPI

KPI	定義	基準	現在値(2018年度)	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度					
1人当たりの査読付き論文の採択数	後期課程入学後6年以内の、学会誌または学術雑誌*1への査読付き論文*2の採択数  *1:「学会誌」、「学術雑誌」は、以下の1つ以上に該当するものを指す。 1) 日本学術会議協力学術研究団体のほか、会則・規約またはそれに準ずるものが整備されている「学会」(研究会は不可とする)が継続して年1回以上発行しているもの。 2) ISBN(国際標準図書番号)がついた学会誌、またはISSN(国際標準逐次刊行物番号)がついた学術雑誌(ただし、入門書等及び授業用に作成した教科書、研究ノート等は除く)。  *2:「論文」は、修士学位論文を要約しただけのもの不可。修士学位論文に新たな学術的知見を追加する(例:同じデータでも異なる分析手法を用いて異なる結果を導いている、あるいは、結論は同じでも新たなデータを付け加えてより精緻な分析ができていなど)したものは可とする。	当該年度の1人当たりの採択数	非公開	非公開	非公開	非公開	非公開					
			2023年度		2024年度		2025年度		2026年度		2027年度	
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開	非公開				
在学生一人当たりの学会での発表数	在学生一人当たりの当該年度の学会*3での発表数  *3:「学会」とは、日本学術会議協力学術研究団体のほか、会則・規約またはそれに準ずるものが整備されているものを指す(研究会は不可とする)。「研究発表」は、大会の部会や分科会での口頭発表や総会でのポスター発表でもよい。	当該年度の1人当たりの学会発表数	現在値(2018年度)	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度					
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開					
			2023年度		2024年度		2025年度		2026年度		2027年度	
入学後6年以内の博士学位甲号の取得比率	入学後6年以内の博士学位甲号の取得比率(n-6年の入学者のうち、入学後6年以内に博士学位甲号を取得している者の割合) *母数:当該年度・学期に在学6年目(12セメスター)を迎える学生数	入学後6年以内の博士学位甲号取得者/当該年度・学期に在学6年目(12セメスター)を迎える学生数	現在値(2018年度)	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度					
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開					
			2023年度		2024年度		2025年度		2026年度		2027年度	
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開					



(3) 学院全体のKPIに関する指標

KPI	定義	基準	現在値 <sup>(2018年度)</sup>	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
卒業後の進路の満足度	卒業後の進路の満足度 （「満足」～「不満」の5段階評価） 卒業時調査	5段階評価のうち「満足」と回答した比率（%）	現在値 <sup>(2018年度)</sup>	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
Well-being 度	現在の自分を取り巻く環境（特定 7 項目） に対して、あなたはどのように思いますか。 （「そう思う」～「そう思わない」の 4 段階評価） IR 卒業生調査	「E 時折、収入面が不安になることがある」を除く7項目に対して A「そう思う」、 B「どちらかといえばそう思う」と回答した割合の平均値	現在値 <sup>(2018年度)</sup>	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開

人間福祉研究科実施計画・全体評価

【前期課程】

修士学位授与者数の増加については、いわば入り口として大学院進学者を増やすことが何よりも重要になる。また、魅力のあるカリキュラム内容に向けて、その再編の検討が必要であるとの認識でその検討に着手する。学部の取り組みとも連動させながら、大学院進学者を増やしていく。就職の満足度向上については、キャリアセンターとの連携を今以上に密にして、大学院生の希望に沿った就職先の迅速な提供を可能にしていく。

【後期課程】

後期課程進学者数の増加については、昨今の状況を鑑みれば難しい状況にあるが、博士号取得プロセスの見直しを通して、より優れた博士論文の執筆とそれを可能とする指導体制を確立させることで、後期課程の魅力を高めていく。同時に、博士号取得プロセスの見直しの副次的効果として、日本学術振興会特別研究員数の増加が期待されることに加えて、優秀な研究者の輩出にもつなげていく。加えて、前期課程で優秀な成績を収めた者を後期課程に推薦入学を認める制度の検討に着手する。